

蚊帳への郷愁

蒸し暑い夜が続く。このころになると私はいつも薄緑色のあの蚊帳を懐かしく思い出す。今では蚊帳など知らぬ人が多かろう。

夜ともなると、ぷーんと高い周波数の音を立てながら、蚊は人間を襲った。蚊やりなどをたくが、なかなかそれくらいで退散する相手ではない。手でたたきつぶしたり、うちわで追い払ったりするが、寝てしまえばそれもできぬ。

結局この季節には、どの家も、部屋一杯に蚊帳をつるし、家族全員がその中に入って眠るのが夏の歳時記であった。

蚊帳は、目の細かい網でできた大きな四角い袋である。六畳間一杯になるくらいの大きさがある。天井はあるが底はない。布団を敷き終わった部屋に、布団を囲むようにしてこの蚊帳をつるすのである。ひもの先に結ばれた真ちゅうの環が美しかった。

狭いから、家族全員が身を寄せ合って眠る。暑いから、縁側や窓などはもちろん開け放っておく。布団に寝て、眠れぬまま蚊帳の天井を見ていると、蚊帳越しに月が差し込んできたりする。吹き込む涼風が、蚊帳全体を揺する事もあった。

最近蚊も少ない。クーラーや網戸も普及し、蚊帳はすっかり姿を消してしまった。しかし、涼風に吹かれながら家族と一緒に蚊帳に眠ったあのころが、自分の一番幸せな時代だったように思われてならないのである。

(平成 16 年 7 月 8 日付け 東京新聞ショッパー掲載)